



企業の学会活動に思う

平野 嘉仁[†]

Thinking about Academic Society Activities of Companies

Yoshihito HIRANO[†]

諸先輩には比すべくもないが、早いものでレーザー学会に入会して30年近くになった。ずいぶん長い時間をレーザー開発とともに過ごしてきたものである。大学から企業の研究所に入った80年代の中ごろは、レーザー加工機や、光ディスクなどの普及にともなって、企業ではレーザーが次世代の事業として認知され始めた夢のある時期であった。固体レーザーのLD励起化が提唱されはじめたのもこの時期である。筆者も、センシング、通信、加工、エネルギーなど、各種レーザー応用製品の事業化を夢みて、出力、効率、時空間コヒーレンスといったレーザー性能の抜本改善や、実用化に不可欠な装置の小型化、低価格化、高信頼化などに寝食を忘れて取り組んだ。固体レーザーを中心に、ファイバレーザー、半導体レーザーなど仲間たちと開発に係わったレーザー装置は、ざっと50を超えている。実用製品にならなかったものも数多くあったが、幸運にも、30年前は夢の夢であったような、世界初の民生用レーザーTVや、風を可視化するドップラーライダーなどの新製品発表の瞬間に立ち会えた。また、最近では、半導体レーザー事業の経営にも携わり、インターネットの爆発的普及にともなって需要が急拡大した光通信半導体レーザーの増産、売上拡大の指揮もとらせてもらった。本当にレーザーエンジニア冥利につきる。振り返ると、レーザー学会にも本当にお世話になった。成果が一朝一夕には現れにくい新製品開発の仕事で、モチベーションの維持は難しい。同業他社との切磋琢磨や、アカデミアから貴重な示唆を頂いたことが本当に助けになった。親しくさせて頂いた方々には、公私共に議論を重ねて頂いたおかげで、自分たちの技術レベルやその方向性を確認でき、一喜一憂しながらも、一步一步前進する原動力を頂いてきたと思う。助けになった学会活動だが、最近、企業の、特に、中心となるべき若手研究者の学会離れが進んでいるという話を聞いた。レーザー学会ではどうかと、40回を数えるレーザー学会業績賞(論文賞、進歩賞)奨励賞の受賞数推移を企業の活躍度合の目安として調べてみた。なるほど、10年前までの30年間は1/3以上で推移していた企業の受賞数(筆頭が企業)比率が、ここ10年で13%、直近の5年は、わずか7%と急減しており、企業のレーザー学会への貢献度が減っていることがわかる。ファイバレーザー等、海外レーザー製品に国産技術が押され気味で開発が停滞したなどの理由も考えられるが、やはり、企業の学会活用方針と、学会が企業に提供する恩恵、ともに見えにくくなってきた事が原因ではないだろうか。情報化が進む中、技術情報が、インターネット検索ですばやく、簡単に入手できるようになった事以外にも、製品開発のスピードが要求される中、ハードルの高い技術開発を敬遠する傾向や、論文執筆や講演準備など製品開発に直接結びつかない作業を時間の無駄とする風潮が、企業組織にも個人にも現れはじめていることが根本的な背景にある気がする。政府方針として働き方改革が打ち出され、各企業も、無駄の削減による仕事の効率化と、それによる労働時間の削減の具体化を押し進める中で、研究開発部門においてすら学会活動を無駄と切り捨てるような事になれば、技術立国日本の企業も学会も衰退してしまうのではと危惧してしまう。どうすれば、この状況を打破し、企業における学会活動の活性化がはかれるのだろうか。企業側では、これまで以上に、長期視点にたった技術ロードマップと学会活動を意識して結びつけて、効率的な新規技術開発に学会を利用していく事を考える必要があるだろう。もちろん、この中で国際競争力の強化に向け、産学官連携の考慮は必須である。一方、学会側でも、めまぐるしくかわるグローバルなレーザー・フォトリソの展開をふまえ、いち早く新しい応用に向けた技術専門委員会の立上げや研究会の開催など、企業の研究開発者に有益な議論の場を提供するよう努力すべきだろう。レーザー生誕60年を2020年のオリンピックイヤーに控え、企業とアカデミアによるレーザー学会の更なる発展を期待したい。

[†] 三菱電機株式会社 半導体・デバイス事業本部(〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-7-3(東京ビル))

[†] Mitsubishi Electric Corporation Semiconductor & Device Group, 2-7-3 Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8310